

中国宋代士大夫の美意識に関する史的研究

——書の鑑賞および題跋執筆を事例として——

(要旨)

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期 人文学専攻

学生番号：D040182

氏 名：津坂 貢政

論文の要旨

本論は、中国宋代の書法作品に対する鑑賞者の評価の内容を分析し、そこに投影された当該時代の文化的支配階層である士大夫の美意識を社会史的手法によって考察するものである。なお本論中の「美意識」という語彙については、当時の文藝の主体的担い手であった士大夫が、作品に鑑賞者として向きあうときに政治的・社会的・思想的な要素が絡み合うなかで形成する評価の価値基準と、それにもとづく作品に対する感応、という意味で用いるものであり、美的価値基準とでも言い換え得るものである。

宋代士大夫の書法作品に対する美意識には、北宋と南宋とで相違が見られるが、本論では、その相違が生ずる歴史的過程を追跡しながら、北宋と南宋の士大夫のそれぞれの美意識の葛藤・せめぎ合いの様相を描き出す。そして、南宋の道学系（朱子学系）士大夫の美意識が、次第に朱子学定着以後の中国士大夫・知識人層に浸透・普遍化し共有され、それが“そうあるべき”との認識として確立してゆく過程を実証的に分析する。以上で得られた結論を敷衍することによって、中国前近代社会における士大夫・知識人層の規範的志向の形成の端緒を明らかにし、それが前近代社会で存在し続けた意義についても論及する。

以上の問題にアプローチするために、宋代士大夫が書法作品などの文物を鑑賞した際にその感想を書き留めた文章である「題跋」を主要な史料の一つとして用いている。「題跋」は作品に対する評価や感想だけではなく、鑑賞者の政治的・思想的な立場、あるいは作品の収蔵者や鑑賞者をめぐる人的関係なども読み解く格好の材料となるのである。

以上の観点と史料により、本論ではまず第一章において、宋代士大夫の具体的な学書の様相を見る。学書の要諦は、その手本となる名跡の法帖を観察し臨書することからはじまるが、宋代においてはそうした法帖の類を目にする機会は万人に開かれたものではなかった。つまり、書人としての修練を積むためには、この法書に触れる機会を確保することがまず何より重要であり、北宋を代表する書人として名が知られている蘇軾・黄庭堅・米芾らはこの機会を官職上の特権や人的繋がりを駆使して獲得していたことを述べ、その際に彼らが魏晋期の貴族の書を重視していたことを指摘する。

第二章では、宋代における書の評価をめぐる美意識には、大きな二つの極が存在していたことを強調して論じる。その一方は先行研究が注目してきたもので、蘇軾に典型的であるように、自身の心の情感の趣に素直にしたがい、そこから生じる独創的な個性の表明を重視する「外向型」とでも言うべき美意識であった。しかし、その一方には、厳然として朱熹に代表されるような、あくまで古典の規範に忠実であることを旨とし、心の涵養と自制的秩序を重視する「内向型」とでも呼ぶべき美意識が存在した。つまり、

従来の研究のように、おおむね前者をもって宋代の美意識の特徴を一边倒に論じることは適切ではなく、宋代には対照的な二つの美意識が明確に存在していたことが重要であることを指摘する。そして最後に、この二つの美意識が、後世の士大夫たちに各様に継承・解釈されていったことから、宋代とは以後の時代の士大夫たちが書、ひいては士大夫文化全般について論じる際に依拠する基本的な参照枠が提示された時代であり、原点として立ち戻るべき美意識の祖型が形成された時代でもあったことを述べて展望とする。

第三章は、第二章の補遺としての役割を担う。ここでは、朱熹が北宋士大夫の一人である蔡襄の書を高く評価することに着眼し、朱熹が蔡襄の書のどこに魅力を感じ、これを称賛するのか、その時代観から考察する。朱熹は、蔡襄の書に六朝時代の鍾繇や王羲之の書風を感じとっていたのであり、そこには書に対する評価と別に、江南に生きる士大夫として六朝文化に対して理想像を抱いていたことや、領土の北半を異民族王朝に奪われた南宋士大夫の一人として、それと同じ境遇にあった東晋時代への共鳴があったのではないかと推察する。

続く第四章では、三章に続いて朱熹の蔡襄への高評価を問題として取りあげ、朱熹が蔡襄の書法を高く評価する背景に、彼の蔡襄に対する理想の士大夫としての敬慕の念と、福建の儒教化に尽力した地方官としての親近性があったことを論じる。

第五章では、題跋の中でもとくに故人の生前の履歴を記した行状や墓誌銘などに付されたものを伝記題跋と称して注目する。朱熹の文集『晦庵先生朱文公文集』所収の題跋二八〇条のうち、伝記題跋は二〇条が確認できるが、それらを検討してみると①朱熹が目にした伝記はすべて宋人のものであること、②題跋の依頼者は概ね朱熹の縁戚や友人・知人、もしくは門人などであること、③伝記題跋の執筆は、朱熹五〇歳以降に集中していること、などが判明する。

かかる諸点を踏まえ、報告では具体的にいくつかの伝記題跋を取り上げる。そこでは、題跋本文はもちろんのこと、題跋が付されている伝記そのものや、朱熹以外の人物による題跋についても並行して分析し、それぞれの伝記題跋が書かれるにいたった朱熹を取り巻く当時の政治的・思想的環境を浮き彫りにし、さらに南宋期の道学系士人の人脈内で交わされる題跋の執筆と回読にいかなる意義があったのかということについても考察する。その結論として、①朱熹による伝記題跋は、彼が道学の思想家として広域的な声望を獲得することにより依頼を受けて執筆されたものであったこと、②そこには、同世代の中核的道学系士人が世を去るなかで、生き残った朱熹が自覚的に道学を顕彰し、また自身の学を他の学から差異化し主張しようとする意図が込められていたこと、③そのための媒体として題跋が機能したこと、などを指摘する。

以上の考察から、本論の結論は、北宋士大夫と南宋士大夫の美意識の相違を指摘するとともに、両宋の士大夫の意識の変化の歴史的意義を問い、その変化をもたらした要因でもある科举制度や朱子学の影響を浮き彫りにすることで、その文化的拘束性の有り様について総括するものである。

なお本論は、朱子学の思想を受容しながら、それぞれに独自の反応を示した朝鮮王朝やヴェトナム、ひいては江戸日本における中国文化の接受の多様性を考察する素地ともなるものである。